「日々の理科」（第 1249 号） 2017（H29）,12,-7

「奥多摩自然観察会（９）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

氷川渓谷の散策と自然観察を終え、再びスケッチした奥氷川神社の境内に戻ってきた。ここには、都内では見られない野生動物が住んでいるという。

自然観察指導員の優れているところは、単に植物や動物の説明をするだけでなく、参加者に「問い」を投げかけて、自然の中で考えさせるという点である。これは日々の理科の授業でも実践しなければいけないことだと思った。

この時は「この神社の敷地に、ムササビの巣があります。さあ、みなさん探してみてください」というものだった。「ムササビの巣穴」とは言わず、「ムササビの巣」と言ったところが面白い。ムササビの巣がどんなものかも想像させようという意図だろう。

私は高尾山の薬王院でムササビの巣穴を見たことがあるので、すぐに見つけることができた。スギの巨木のかなり高いところに、ぽっかりと穴があいている。昼なので、中にムササビがいる可能性が高いという。

ムササビの姿は見られなかったが、ムササビがいる証拠はたくさん見つかる。今度はみんなで巣の下の地面の観察が始まった。

これは杉の果実（球果）である。マツでいえばマツボックリに相当するもので、鱗片の隙間に、種子ができる。この球果はムササビの良い餌となる。写真は、今年落ちたばかりの新鮮な果実が、ムササビに噛まれたあとである。

フンもたくさん見つかった。ウサギのフンに似ている。ムササビは滑空や木登りは得意だが、地面に降りると動作は緩慢になるという。いやいや、実に楽しく勉強になった一日だった。